

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 52 号

2005 年 3 月



高山・的場川周辺のブナ雪上観察会

2月5日(土)に高山・的場川周辺のブナ雪上観察会を実施しました。参加者は16名でした。土湯温泉から川上温泉方面に向かう道路の右手に開かれた不動湯温泉への登山道から歩き始めました。杉植林地斜面を進み、その右手に開かれた高山ツアーコース149番の黄色い看板が打ちつけられたコナラが目印の「高山」の山スキーコースを辿りました。枝打ちなどよく管理された人工林の急傾斜を登り、新男沼林道の十字路口に出ました。

前日に降った新雪が重く、林道歩きはともかくとして、急斜面のショートカットには苦労しましたが、コナラやミズナラ、ヤマグリの樹皮の違い、ツノハシバミの冬芽、ニホンザルの食痕。ケヤマハンノキの赤い花序などを観察しながら何とか高山登山口に到着。一息いれてから登山道を登り、902mから分岐するミズナラの2次林に分け入りました。緩いピークを越して振子沢への急斜面を下ると振子沢を境界にして林相が一転、ようやくブナの大木が優占するブナ林に到着しました。ここは会の原点とも言うべき場所です。時々、強風が斜面を吹きぬけるたびに森は白い世界で蔽われ、ブナとミズナラの巨木群が聳え立つ斜面の景観がより一層、荘厳に脚色されました。



登りはじめは杉の植林地

インターネットに載せられた巨大なブナ。ゴツゴツした樹皮からは年代と風格が伝わってくる。2月5日（曇り）参加人数16人。垂直な雪壁で固められた道路脇の登山口を這い上がり、スキーが先頭スノーシューが後に続いて歩き始めた。フワフワ雪の歓迎に汗がにじんできた頃、ニホンカモシカの足跡に出会った。「右前足の足跡に右後足を、左前足の足跡に左後足をつく。」との説明に目を近づけて見ると足跡が重なってついていた。ノウサギの足跡は大きな後足が並んでつき、その後に前足が前後してついているのに対して、ニホンリスは前足と後足が行儀よく並んでつき、両方とも進行方向に後足がつくことが分かった。時間がたった足跡もあったが観察会の資料で確かめることができた。

林道に出ると樹木の観察会に変わった。根元から何本も幹が出ているエゴノキ・枝の先端に雄花が2、3個垂れ下がるケヤマハンノキ、ケヤマハンノキに似ているが先端より少し下に雄花を2個垂れ下げたツノハシバミ、ウリハダカエデ、カジカエデと次々の説明に頷き頷き歩いた。

佐藤さんがつけてくれた巨木ブナの正面に続くトレースを流行る心を押さえ歩いて行くと、群を抜いだ一本の大きなブナが現れた。小さな沢をはさんで全員で見つめ歓声をあげた。高橋さんは平らなところに職人技のスコップさばきで16人用テーブルを作ってくれた。帰り支度を済ませブナを見上げていると突風が背中を押した。それを待っていたかのようにブナに向かって歩き始めた。樹皮は幾重にも波



打ち深い溝が縦に刻まれ瘤ができていた。風雪にさらされ何百年も生きてきた証がそこにはあった。少しずつ上げていった目線は、思いもよらぬ生き生きとした木肌への変容に驚き根元と何度も見比べ見つめ直した。なおも見上げていくと灰色の空に四方八方に伸ばした白い枝は、4尺玉火花のように私を包んでいた。威圧さえ感じられたブナは慈悲の温かさにあふれていた。目をつぶるとゆったりとした声が降ってきた。「寒い日によく来たね。春夏秋冬それぞれ味わいがあるよ。それを確かめにいつでもおいでよ。」そこはメルヘンの世界の入り口だった。



安達太良山にある勢至平の東側には、「八丁林」と呼ばれるカラマツ林があります。数年前から気になっている場所として、「ここはこのままカラマツ林で良いのだろうか」というのが最初の疑問でした。

八丁林と呼ばれたのは、カラマツ林になってからのことのように、湯川溪谷沿いの登山道が開設される前に「塩沢ルート」として利用されていた頃のことではないかと思います。これは、スキーツアーのルート図集でも紹介されているコースですが、現在では「廃道」と言っていると思います。

カラマツを植える前の植生がどうだったのかと思い、古い地図を見てみました。手元にあるなかでは最も古い、昭和 44 年発行 5 万分の一地図では、「荒地」マークになっています。さらに、森林管理署で作成している管理図を見ると、「カ 84」とあります。84 年生のカラマツ林ということです。大正時代から昭和初期にかけて、失業対策としてあちこちで植林事業が行われていたようで、安達太良山麓には、同じような古い植林地があちこちにあるのでした。岳温泉の二瓶義松さんにうかがった話では、「以前は茅場だった」というらしく、「ブナ・ミズナラ林の時代があったはず」という私の仮説までは、今のところたどりつけていないのです。そもそもこのあたり、少なくとも 9 世紀あたりから人間がなんらかの営みに利用していたようで、「原生林」の時代までたどりつくのはきわめて困難なことなのかを感じているのです。

八丁林は、雪のあるときには割合簡単に歩けるため、たまにクロカンスキーで見に行くのですが、一見整然と並んでいるように見えるカラマツ林でも、そのすき間にはリョウブがけっこう多いし、低層中層に広葉樹が混じっていることが目につきます。そして、大きめの隙間（林冠ギャップ）には、ダケカンバが堂々と枝を伸ばし、カラマツよりも存在感を示しているのです。その力強いダケカンバを見たときに、「この森は大丈夫だな」と感じたのです。といっても、このカラマツ林内に他の樹木が育つことのできる穴が生じる確率は、そう多くはないかもしれません。もしもこのカラマツ林を、広葉樹林との複層林あるいは混交林へと導入し、最終的には、極相としての「ブナ・ミズナラ林」に転換することを目指すのならば、「ダケカンバなどの稚樹を伸ばすためのカラマツの抜き切り」という方法があっても良いのではないかという、当初からの希望も多少は残っています。しかし、それにはかなりデリケートな選木技術が必要とされるわけなので、「何もしないほうが良い」かもしれません。

ちなみに、このカラマツ林の一部に小さな沼（黄判沼）がありまして、モリアオガエルの棲息が確認されています。また、平坦な地形ということもあり、カモシカやウサギの足跡も少なくなく、森林計画図の中での「単相なカラマツ林」というイメージとはかなり違うぞという印象です。

八丁林は台地状の林ですので、最短距離でここに登ろうとすると、けっこう急斜面を登る必要があるのですが、アプローチとして使いやすい塩沢スキー場から入ると、ブナ・ミズナラ林の中を登ることになるわけです。「湯川溪谷」ということのできるそのあたりの谷沿いには、安達太良の東面では珍しい感じのブナやミズナラの大木を見ることができます。同じように、西側の鳥川沿いにある「熊の穴水源」から登る急斜面では、ブナやウダイカンバの大きな木を見ることができます。それらの植生から、八丁林の「潜在植生」というものを「ブナ・ミズナラ林」に結びつけるのは、かなり強引ですが、奥岳スキー場やら安達太良連峰の稜線からもよく見えるこの林が、そんな広葉樹の森になったらどんなにすてきなことかという期待があるわけです。カラマツ林から抜け出るダケカンバは、そんな森の先駆けとなるのでしょうか。



カタクリの会観察会参加レポート

子供が元気な雪の自然観察会に脱帽！！

佐藤 守

いつの頃からだったか、冬になるとカタクリの会の瀬川夫妻宅にお邪魔するのが毎年の恒例となった。初めは、奥田さんに誘われて、ついてきているだけだったのが、いつの間にか湯田の自然が好きになり、夏には家族旅行で訪れるほどになった。瀬川夫妻にも福島の森好き人間と認知されるに至ってはいるが、湯田に来るたびに瀬川夫妻の自然に対する造詣の深さにあきれかえって帰福している。

1月23日（日）、カタクリの会「峠山・雪の自然観察会」に参加した。今回も、いくつか印象に残ったことがあった。まず驚いたのは、真冬の観察会ということに子供の参加者が多いことだ。参加した子供たちが雪深さを気にも留めずに嬉々として歩き回っている姿に岩手の子供達の逞しさを感じた。陽子さんが、子供の目線に合わせるようにかがみこんで、森と動物の命の連鎖についてやさしく語りかけている情景は、雪の中にもかかわらずその場全体が温かい空気に包まれていた。

出だしの二次林では、ヤマハンノキとタニガワハンノキ(コバノヤマハンノキ)を観察することができた。私のホームグラウンドとする高山（たかやま）山麓ではケヤマハンノキが中心でタニガワハンノキとは今回が初めての出会いである。自分では理解していたつもりハンノキ類の同定法も雌花の着き方については認識しておらず、その説明も新鮮で2重の喜びであった。ザックにしまっていたマクロレンズを取り出してヤマハンノキとタニガワハンノキをじっくりと撮影させてもらった。私としてはこれでもう十分この観察会に参加したお土産をいただいた気分であった。今回のコースは、フィールドサインも豊富で、キツネ、リス、ウサギの足跡や廃園となったクリ林のクマ棚、雪が転がってできる雪まくりなどを観察できた。これらの見分け方や種類などを、強さんが、お手製の紙芝居で子供たちに分かりやすく解説してくれた。食い入るように話を聞く子供達の姿が印象的であった。何気ない風景であるが、そう簡単に実現できるものではないことを、少なからず観察会を重ねている私はいつも思い知らされている。

帰福後、観察会の下見に高山のブナ林を訪れた。奥羽自然観察会の翌週であるだけにキツネ、リス、ウサギの足跡同定に迷うことはない。林道斜面にできためずらしく立派な雪まくり岩手の情景が重なる。コース途中にあるケヤマハンノキの林では雄花と雌花の形態を改めて観察しなおし、タニガワハンノキとの違いを再認識し岩手行の余韻を楽しんだ。



子供は真剣に動物の足跡を考える



手製の紙芝居でお話



紙芝居を真剣に聞くのは子供も大人も同じ



説明する瀬川夫妻

1月22日(土)、早朝、予想以上の雪が降りしきるしのぶの里を後に奥田さんの新車で東北自動車道を北上する。今回の福島からの参加は鈴木勝美さんと3人である。路面は着雪しているため高速モードの速度は出せない。国見インターを過ぎたあたりから、雪が少なくなってきたが、1時間程度予定より時間をロスした。瀬川さんに電話をして待ち合わせ時間を調整する。

今回登る山は、羽山(599.9m)である。陽子さんの提案らしい。岩手日報社から出版されているガイド本によると羽山は里の端にある山で「端山」が転じて羽山となったという。無人駅ながら地元の公民館が併設されたJR北上線岩沢駅で瀬川夫妻、秋田県横手市の佐藤護氏と合流する。

登山口には立派な鳥居が建っている。羽山の頂上には羽山神社が祀られているので、夏の登山道は参道とも解釈できる。右手の急斜面を登り尾根に出る。しばらくはアカマツの植林地のやせ尾根を辿る。小ピークに出て鞍部から左斜面を巻いて尾根にとりつくとミズナラの若木が中心の広葉樹林となる。植林のため伐採されたが、そのまま放置されたために再生した2次林らしい。はじめは平坦な斜面も広葉樹の植生密度が高くなるとともにきつくなるが、それも1登足でなだらかな尾根に飛び出し1息。視界が広がり岩沢地区の集落を俯瞰する。ここからは、登るほどにブナが多くなり、比較的大きいブナが散見される。

右手に箒状に幹を起てたブナの壮木をやり過ぎると、雪に覆われた祠がある頂上にたどり着いた。頂上の南斜面は見事なブナ林。林間を縫って降り注ぐ日差しを雪の林床が照り返し、ブナ林が明るくきらめいたが、それもつかの間で、またたく間に強風が吹きまくり、ツエルトを羽織つての昼食となった。

標高600m足らずの里山とは言え、見事なブナ林を頂上に抱えた和賀の山の自然の豊かさと厳しさを味わうことのできた山登りでした。



川柳らしく文

S氏より投稿

庭(鉢)よりも野山で咲きたい山野草
 ストックの穴ぼこだらけ百名山(登山道)
 タラノメもすっかり採られ枯れかかる
 湿原も排水溝で乾燥化
 環境の謳い文句で観光化
 盗掘の商売人は抜け目無し
 林道の整備はゴミのおまけ付き
 堰堤のカムフラージュに岩と滝

・・・山野草愛好家へ一言申したい
 ・・・????!!!
 ・・・山菜取りのマナーを思う
 ・・・西吾妻の過度の整備
 ・・・世界遺産ってなに?
 ・・・水原のクマガイソウでひとこと
 ・・・観察会にて
 ・・・自然にとけ込むよう景観に配慮してるってこと?

